
ゼロの使い魔ッス！

毒弦竹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔ッス！

【Nコード】

N2155U

【作者名】

毒弦竹

【あらすじ】

掃除・洗濯・炊事、その他雑用まで何でもこなす魔界の万能型雑魚キャラ「プリニー」。そんな彼が、才人と一緒にルイズに召喚されたら……？ ゼロの使い魔の世界をプリニーが才人と共に駆け抜けていく。笑いあり、涙ありのドタバタアクションコメディー、開幕ッス！

ブローグッス

今からちょうど二年程まえの事だ。

僕は、いつの間にか僕じゃなくなっていた。……こう言う言い方は、誤解を招くか。

正確には、人間の身体からとある動物の身体に変化していたのだ。

それが……ペンギン。

しかも、ただのペンギンではなく、ペンギン風のぬいぐるみの魔物に身体が変化していたのだ！

この姿は、プリニーという魔物らしく、聞いた話によると、死んだ罪人の魂が入っているらしい。罪人って……僕、何も罪を犯して無いんですけど。そもそも死んでないし。

同僚のプリニーにそのことを相談してみると、「怠惰な生活を送っていたのが原因じゃないッスか？」と答えられた。

そう言われてみると……確かに僕は怠惰な生活を送っていた。

大学を卒業してからというものの、定職に就かず、ずっと家でゴロゴロとしていた。「怠惰」は人間の罪だと、大学の教諭も言っていたし、そう考えてみると僕は罪人なのだろう。

ただ、謎なのが何故僕は死んでいないはずなのに、プリニーになったのか。それは今でも分からない。誰かがミスったという自説が今一番有力ではあるが……。まあ、プリニー界は結構ずさんだからな。

だからといって、僕はそのままプリニーの姿に甘んじることを良しとはしない。可能ならば人間に戻りたい。

プリニーが、人間に再び転生するためには罪を洗い流さなければいけない。

天界のプリニーであれば、善行を積むことにより罪が洗い流されるが、僕のいる魔界ではまた違ったシステムなのだ。

力のある悪魔に雇われて、超低賃金の超重労働を行いお金を稼げば罪が洗い流される。地獄の沙汰も金しだいってことだ。

プリニーは、魔界ヒエラルキーでは最低のランクに位置づけられている。超低賃金超重労働でも文句を言えない立場なのだ。

クーデターを起こそうにも、戦闘力が低い。数だけは馬鹿みたいに多いので、死んで（？）も変わりは沢山いるのだ。

プリニーの悲しい現実だな……。目から熱い汁が流れた。

「コオラ！ プリニーどもっ！ パフェはまだか？！」

と、回想に浸っていると女性の怒鳴り声によってハッ和我に返される。

我らが主君、エトナ様がお怒りではないか。

プリニーは職場を選べないと言うが、一番のハズレくじを引いてしまったとは……。本当に悔しい。

彼女の性格は、一言で言うのであれば傍若無人である。

非常にワガママで、いつも無理難題を提示してくる。それに応えられないと、直ぐに癇癪を起こして、お仕置きされてしまうのだ。何十回とお仕置きを受けてきたが、あれは慣れない。

まったく、貧乳のクセに。せめて、これがバインバインのお姉ちゃんだったら……。

「プリニーどもっ！ まだかつ？！」

これ以上は待たせられない。たく、今日の配給係りは誰だ……つて僕だった！

ヤバい、ヤバい！

完璧に忘れてたよ！

すぐさま食堂まで走り、冷凍庫からパフェを取り出し、エトナ様の部屋へと急ぐ。

「エトナ様ーッ！ スイーツをお持ちしましたッス」

バンと扉を開けると、部屋の豪華なソファーに寝そべり、エトナ様はせんべいをポリポリと食いながら、テレビを見ていた。

「遅い！ 何時まで待たす気よ！」

「すみませんッス！」

視線をテレビから動かさずに、エトナ様は怒鳴り声を上げた。

この女の方が怠惰の罪を負ってないだろうか？

世の中理不尽だろう。

「で、エトナ様？ パフェはどこにおけばいいッスか？」

「そこにも置いときなさい」

指さされた先には、色々と重要そうな紙が積み重なった机。そう

いえばエトナ様は、こんな性格でも魔王陛下の重鎮だったな。

臣下が臣下なら、王も王で、魔王ラハール陛下もかなり癖の強い性格をしていた。

一回だけ一緒に仕事をこなしたことがあるが、僕は二度と一緒に仕事したくない。切実に。

さつさとパフェを置いて、この部屋から出ていこう。余り長居していると何をされるか分かったものじゃない。

僕が一步足を踏み出したちょうどその時。

床に落ちていた書類に足を滑らせてしまった。

手をバタつかせながらなんとか踏ん張って耐えた。

「ふう……危ないところだったツス」

さて、パフェを……あれ？ 右手に持っていたパフェが無い。何処に行ったのか。まさか、床に落とした？

やべー、早く証拠を隠蔽しなければ！

床に這い蹲り、血眼になりながら残骸を探す。

チョンと肩をつつかれた。うるさい、今はそれどころじゃないんだ。肩でつつばらった。

だが、またしても肩を叩かれた。

「ウルサイっスね……誰」

だと続く前に固まってしまった。気がついてしまったからだ。この部屋には、僕とエトナ様しかないことに。

ギギギと、油の切れたロボットのようになり返る。すると。

満面の笑みを浮かべたエトナ様が、仁王立ちをしていた。

一見すると、にこやかではあるが、僕には後ろに修羅が見えた。視線を上げて、エトナ様の髪の毛を見てみると、パフェの残骸を頭に綺麗に被っていた。

あ、僕終わった。

「……一回死んでみようか」

エトナ様が手をかざした。

膨大な量の魔力が集まってきている。いやいや！ そんなのくらったら存在ごと消去されてしまうって！

「も、申し訳ありませんッス！ だから許して下さいッス！」

「うん、無理」

そんな殺生な！

僕は完全に腰が引けてしまい、ぺたりと座り込む。

魔力の塊は僕の大きさの二倍以上に膨れ上がり、今にも発たれそうだ。

その時だ。

僕の目の前に、水晶のように透き通る鏡が突如として現れた。

「な、何なんス力？」

鏡は答えない。

エトナ様も鏡の存在に気がついていないみたいだ。

もしかしたら神さまがくれた生き残る為の唯一の手段か？
一か八か、僕はその鏡に飛び込んだ。

召喚に巻き込まれたツス

鏡の中は、まるで海のような世界だった。

プカプカと浮きながら、流れに任せて移動していく。

どうやら今僕は、誰かに召喚されようとしているらしい。プリニ
ーの先輩の話では、「召喚は海の中にいるようツス」とのこと。ま
さに、今僕が体験している感覚と同じだ。

すぐに引き返せば、戻れるだろうが今戻った所でヒドい目に遭う
のは明確だろう。

なら、このまま漂うか。エトナ様以外の悪魔に従うのもいいな。

「これは何処まで行くんスカねえ」

体感時間では、もう半日ほど経っているはずだ。それでも、出口
が見えない。

どこまで見回してみても、あるのはただ一面の水色の景色。変わ
り映えの無い景色に飽き飽きしてきた。

「ま、たまの休暇だと思ってゆっくりするツス」

ここ最近は何も詰めたかったからな。

エトナ様の我が儘に付き合わされ、無理やり出撃させられる戦闘、
それが終われば城の掃除。そのサイクルで一日が回っていた。

年中無休の超絶ブラック企業だ。

暫く流されていると、ぽつかりと穴が開いている場所を見つけた。
あそこから光が射し込んでいる。あれが出口だろうか。

ばた足で近づいていく。そして、穴を覗いてみた。

「うわぁ……」

ピンク色の髪小さな女の子が、こちらをじつと睨んでいた。一見すると、美少女だが僕には分かる。あれはエトナ様と同じベクトルの人間だ。

吊り目に貧乳だぜ？ 八割型どぎつい性格に決まっている。（プリーニー統一機構情報）

「この子に召喚されるのはゴメンっスね。他の出口を探すッス」

回れ右をして旋回すると、何処からか人間の悲鳴のような声が聞こえてきた。

それは、だんだんと此方に近づいてくる。
な、何だ？

「うわぁぁぁぁぁ！」

見ると、少し先からパーカーを羽織った少年が、ものすごい速さでこっちに向かってきていた。

僕はいきなりの事態に驚いて、身がすくんでしまった。

そうしている間にも、少年はどんどん近づいてくる。よ、避けきれない！

「「うわぁぁぁぁぁ！」」

どんとぶつかって、勢いよく僕は外にと躍り出てしまった。

私は今とても焦っていた。

「ミス・ヴァリエール、次失敗したら……」
「分かってますっ！」

私の叫び声に、コルベール先生は、困ったような表情を浮かべて頬を掻いた。

言われなくても、分かってる。この召喚に失敗したら退学だなんて。

一年前から耳にタコが出来るくらい言われていたのだ。忘れている方がおかしい。

ぎゅっと杖を強く握りしめた。

私はみんなが当たり前に使える魔法を使いこなすことができない。何故か必ず魔法は失敗し爆発してしまうのだ。

理由は分からない。教わった通りやっても上手くいかないのだ。それでも、サモンサーヴァントだけは出来る。根拠の無い自信があったが、もろく崩れさってしまった。

これ以上、ヴァリエールの名に泥を塗ることは許されない。ヴァリエール家初めての退学者になるのは絶対に避けなければ……！

奥歯をギリツと噛み、気合いを入れる。

「宇宙の果て、天界から地獄の果てまでのどこかにいる私の使い魔よー！」

杖を掲げ、高らかに宣言する。

「神聖で、美しく強力な使い魔よ！ 私は心から求めるわ！ 我が導きに答えよ！」

瞬間、爆発が起きた。

また、失敗……？ けほけほとむせながら、前を向いてみると、二つの影があった。

やった、成功した！ と思ったが、その姿を見て、私は落胆することになる。

「こ、こんなのが神聖な使い魔？」

一つは、アホ面をさらしているペンギンのぬいぐるみだった。こっちは使い魔じゃないだろう。もう一つは、いかにも平民といった服を着ている少年。

少年がパチリと目を開けた。

私は少年の顔を覗きながら尋ねた。

「あんた誰？」

「誰って……平賀才人」

「どこの平民？」

少年はきょとんとした顔を浮かべた。

全く……これだから教養の無い平民は。

小さく嘆息すると、誰かが大きな声を上げた。

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出してどうするの？」

馬鹿にしたようにクラスメートたちは笑う。顔がカーツと熱を帯びる。

「ちょ、ちょっと間違っただけよ！」

「ルイズの間違いはいつものことだな。流石はゼロのルイズ」

「しかも、平民だけではなく変なぬいぐるみまで呼び出して……馬鹿じゃないの？」

どつと爆笑の渦が巻き起こった。

その時。

「……………ウルサイッスねえ。静かにして下さいッス」

ぬいぐるみだと思っていたソレが、むくりと立ち上がりしゃべり出した。

しん、と辺りは静まり返る。
そして。

「……しゃべったーッッッ?！」

「うおっ?! そりゃ喋るッスよ」

使い魔ツス

目を開けると、晴れ渡る青空が目に入った。

魔界では、いつも空は厚い雲に覆われていたのでなかなか新鮮な景色だった。

（あれ、ここ何処ツスかね……）

人の気配を感じて目を動かし、ぽかんと顔を惚けさせたどこか懐かしさを感じさせる、東洋人風の顔立ちの少年を見て、全てを思い出した。

僕は召喚に巻き込まれたのか。

ため息をつきなくなった。どうして僕はこう、ついていないのか。

自分がナーバスな気分になっているのにも関わらず、周りから聞こえてくる暢気な笑い声。

ウルサイ。実にウルサイ。

僕はむくりと起き上がった。

「……………ウルサイツスねえ。静かにして下さいツス」

シン、と辺りが静まり返った。何だ？ 一体何を驚いているのか。視線は……僕に集まっていた。何かおかしい所でもあっただろうか。

「……しゃべったーツツツ？！」「」

「うおっ?! そりゃ喋るツスよ」

喋らないわけ無いだろ。プリニーだぞ?

僕を召喚したピンク髪の少女が、目を白黒させながら尋ねてきた。

「あ、あんた何?」

「何って、プリニーっスよ」

何を言ってんだ?

プリニーって天界でも魔界でも割とメジャーに見られるぞ?

恐らく人間界でも知っている奴らは多いだろう。殿下……今は陛下か、魔王陛下が三界を遊び回っているからなあ。

「プリニーなんて魔物聞いたこと無いわよ!」

この言葉に僕は衝撃を受けた。プリニーを知らないだと? じゃ

あ、ここは。

(もしかして、異世界ツスカ?)

そんな。そんなのって……………。

やったーッ!

遂に、我が儘魔人エトナ様の魔の手から逃れることが出来たっ!

エトナ様とはいえ、数多ある異世界から僕を探し出すことは難しいだろう。

くっくっ……………召喚最高っ!

ここならば直ぐに金を貯めて、転生する事が出来るかもしれない。

「ミスタ・コルベール！ もう一度召喚させて下さい！」

バラ色の未来に思いを馳せ、忍び笑いをしていると、召喚者である少女がそんな事を言い始めた。

ちよ、ちよつと待って！ そんな、即刻クビだなんて……！

「ま、待って下さいッス！」

ガシツと少女の足をつかむ。

「ちよ、ちよつと！ 何すんのよ！」

「掃除洗濯料理まで、雑用ならなんでもこなす万能雑魚キャラプリニッスよ？ 手放したら損ッス！」

「知らないわよ！ 私はもつとカツコイいのが良いのよ！」

「一家に一台のプリニッスよ？！ お願いですから雇って下さいッス！」

ギヤーギヤーと主人（予定）と言い合う僕。雇い主に対する態度ではないが、僕も後には引けない。

生活がかかっているんだよ！

「ミス・ヴァリエール」

人垣を割って、黒いローブを着たハゲが近寄ってきた。手には大きな杖を持っている。ザ・魔法使いって感じのハゲだ。

「良かったじゃないか。召喚出来て」

「全然良くないですよ！ 召喚をやり直させて下さい！」

「それは出来ない。ミス・ヴァリエール、例外は認められない」

「でもっ！」

「でもない。そもそも君は、かなりの数失敗していたのだ。こ

の召喚を無かったことにしても、召喚を成功させられるかは分からない」

「ぐう……」

少女はそれ以上は何も言わなかった。何か知らないけど、ナイスだ、ハゲ！

その代わり、少女に親の敵をみるような目で見られた。……怖い。暴君エトナ様と変わらないその威圧を感じて僕は悟った。嗚呼、ここでも環境は変わらないだろう。

「さあ、さっさと契約を」

ハゲの言葉に渋々と少女は従ったようだ。ようやく契約か。僕は一枚の紙を取り出すために、腰につけてあるポーチをゴソゴソと探る。

あれ？ 契約用紙どこやったっけな？

「ミスタ・コルベール。この場合はどちらに……？」

「ウム……片方だけで宜しいでしょう」

僕は急にヒョイと持ち上げられた。

少女の整った顔が近くにある。……にも関わらず、全然ドキドキしない。これは、彼女がエトナ様と似た雰囲気を持っているからだろうか。持ち上げられながら、マジマジと観察された。

「そんな見つめらると照れちゃうッス」

（……この嘴にキスすると、唇が切れそうね。仕方ない、平民にしましょ）

「スルーっスか？ ボケ殺しは犯罪ッスよ？」

少女は乱暴に僕を落とした。……落とした？！

地面が近くなる。何とか衝撃を抑えて、僕は着地した。

「プリニーの取り扱いには気をつけて欲しいツスよ！」

プリニーは強い衝撃を受けると、辺りを巻き込んで爆発するのだ。一回死んでいるので、死にはしないが回復までに時間がかかる。

あと、超激痛が走る。死んだ方がマシだと思うほどの。

僕の必死の叫びは悲しいかな、彼女に届いていないようだ。……悔しいです。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

少女は、まだ状況を飲み込めていない少年の顔を両手で包むと――口付けを交わした。

コレには流石の僕も驚いた。

キスから始まる物語は、漫画や小説では見たことがあるが、まさか目の前でお目にかかれるとは。

口付けの時間は一瞬だった。

両者とも顔を真っ赤にさせていた。おー初々しいねえ。

「ただ、リア充爆発しろツス」

人間だった頃の記憶を思い出して、一人血涙を流す。畜生、僕もコイツみたいに美少女からキスされたかった。

「い、いきなり何しやがる！」

少年が立ち上がって、少女に怒鳴った。しかし、少女はまるつきり無視した。

……いきなり倦怠期か？

「コントラクト・サーヴァントはきちんと出来たね」

ハゲが嬉しそうに少女に向けて言った。

「一体おまえらは何なんだよ！ オイ！ ここは、何処だ？！ カメラは何処にある？！」

少年はそう喚いた。

恐らくけど、コイツも異世界召喚された口だろう。だから、あんな取り乱している。

（取り乱しているのはそれだけのせいじゃ無いだろうっすけど）

目が覚めて、いきなり知らない可愛い子にキスされたのだ。男であれば動揺するのは仕方が無い。

「熱ッッッ！」

少年が左手を押さえてうずくまった。

何だ？ 中二の時にかかる特別な病なのか？

「安心しなさい。使い魔のルーンを刻んでいるだけだわ」

「お前……俺の体に何しやがった」

「だから、使い魔の証を刻んだだけよ」

見ると、確かに少年の左手にはタトウーのような彫り込みが浮かび上がっていた。使い魔の証を刻む、ねえ。

世界が違えばやり方も違うんだなあ。

「これは珍しいルーンだ。スケッチさせて貰おう」

ハゲは少年の左手のルーンを、スケッチした。

「それでは、これにて召喚の儀を終了する。各々使い魔との親睦を深めるように」

ハゲは最後に解散と付け加えると、周りの人間たちは使い魔と共に、バラバラとどこかへ向かう。

広場に残ったのは、僕と少年と、僕たちを呼び出した少女だけだった。

「ふう……疲れたわ」

「疲れた、じゃねえよ！ オイ、お前！ ここは何処なんだよ！」

「もう、ウルサイわね……平民が貴族にそんな口利いて良いと思ってるの？」

「ハア？ 貴族う？」

「そうよ。ま、説明はしてあげるから一旦私の部屋に着なさい。…

…と、そのペンギン！」

「は、はいッス！」

「アンタも私の使い魔なんだから、その平民と一緒に着なさい」

……どうしよう。使い魔の証とやらは刻まれていないし、逃げれるっちゃ逃げれる。まだ、主人（予定）の少女とは数十分の付き合いしかないが、待遇はエトナ様の所と変わらない気がしてきた。雇ってくれとは告げたが、今からでも他の主の所に……。

「分かったわね？」

「あ、アイアイサー」

迫力に気圧され、僕はつい敬礼をしてしまった。

嗚呼、僕のバカっ！

少女は怒り肩で、僕たちのことを考えずにどんどん歩いていく。

僕は少年と見つめ合った。

「……君も大変なことに巻き込まれたツスね」

「ああ……って、何でペンギンが喋れてんだ？」

「僕はペンギンじゃなくて魔物ツスから。プリニーと呼んでくれツス」

「あ、ご丁寧にどうも。自分は平賀才人です」

使い魔同士交流を深めて（傷の舐めあいとも言つ）いると、我らが主人から檄が飛んできた。

「ちょっと！早く着なさいっ！」

「分かりましたツス！……サイト、取りあえずご主人様に着いていくツス。説明を受けて、これからどうするかを決めるツスよ」

「ああ、そうだな」

事情説明ツス

「それ、本当に？」

「嘘ついてどうする」

僕たちは主人のルイズ様の部屋で、簡単な自己紹介をしていた。テーブルを挟んで、向かい合うような形でサイトとルイズは座っていた。

僕は椅子が無かったので、サイトの太ももの上で、彼に抱きつかれながら話を聞いていた。

ルイズ様はパンを千切って、口の中に放り込んだ。粗雑な動きだったが、どこか上品さを感じる。

「異世界ねえ……ある訳無いじゃない」

「いや、ある。俺の住んでいた国には、魔法なんて無かったし、月が二つも無かった」

驚くべきことに、このサイト少年は、嘗ての僕と同じ国出身の間だったらしい。ただし、平行世界のと注釈がつくが。いやあ、どうりで聞き覚えがある言葉だと思ったんだよ。

「信じられないわ」

「俺だって」

「嘘ついてない？」

「つくわけないだろうっ！」

サイトは怒鳴った。僕を抱きしめる力が瞬間的に強くなる。

「サイト、痛いッス」

「あ、悪い」

「……全く、怒鳴らないでよね。平民の分際で」

「誰が平民だよ！」

「イタタタ！ サイト、首締まってるッス！ 死ぬ、死ぬッスから！」

どうにもサイトとルイズ様の馬はあっていないようだ。まあ、ルイズ様の態度は尊大で、貴族のきの字も知らないサイトからすれば腹に据えかねるのだろう。

僕もこの身が人間で、かつエトナ様の下で働いていなければ生きていたかもしれない。

実際にプリニーになった当初は、エトナ様に突っかかってばかりだったが、何度も死ぬような目に遭わされて、ようやく気付いたのだが。

僕が見いだした処世術。それは、主人に絶対服従。

裏で主人のことをどう言おうと、主人の前では出来るだけ服従の姿勢をみせる。そうすれば、長生き出来るのだ。

「証拠はあるの？」

「ああ」

サイトは頷いて、鞆を開けた。

「なにこれ」

「ノートパソコン」

おお、懐かしいな。

ルイズ様はそれを見て感心したように声を上げた。

「確かに、見たこと無いわ。なんのマジックアイテム？」
「魔法じゃなくて、科学だ」

サイトがそれを起動させた。独特な音を鳴らし、パソコンは立ち上がりパスワード画面がディスプレイに映った。

「うわあ、なにこれ？」
「ノートパソコンの画面だ」

驚いた声を上げるルイズに、少し得意げな顔をサイトは浮かべた。

「これって何の系統の魔法で動いてるの？」
「魔法じゃない、科学だ」

科学、人類が発展して得ていった技術のことだが、当然ルイズ様は知らない。キョトンとした顔になっていた。

「カガクって、何系統？」
「ああもう！ 魔法じゃないんだよ！」
「何よそれ！ キチンと説明しなさい！」

二人は机をバンと叩き立ち上がると、言い争いを始める。
僕はなんとかサイトの腕から抜け出すと、パソコンのキーボードを触った。

こう懐かしいものをみると、いじくりたくなるのは何故だろう。
パスワード……何かな？
サイトは単純そうだし。

言い争いを続けているサイトに声をかける。

「サイト、誕生日はいつツスか？」

「ああ?! 七月二十五日だ!」

此方を見向きもせずに答えた。
ふむはむ、では七二五と。

エンターキーを押すと、パスワードが解除された。
サイトのデスクトップに切り替わった。

デスクトップの画像は……うわあ、アニメのキャラクターかよ。

「サイト、デスクトップ画面にコレは無いツス」

「うん? って、プリニー! なんでお前は俺のパソコンのパスワード解除出来てんだよ!」

「何それ……絵?」

「見るなあ!」

サイトはパソコンを強制終了させた。あーあ、壊れちゃうよ。
顔を真っ赤にさせて、サイトに睨みつけられた。

「そういう趣味を恥ずかしがることは無いツスよ」

「ほっとけ! なんて、パソコンの使い方分かるんだ!」

「そう言われても……僕の暮らしていた所はパソコンは珍しく無かったツスから」

「お前、日本で暮らしてたのか?!」

「あながち違うとも言い切れないツスが、違うツス」

サイトは気落ちした表情を見せた。

……何か、悪いことしちゃったかな。

ルイズ様は深くベッドに腰掛け、疑問をぶつけてきた。

「そついえば、あんたはどこから来たの？」

「僕ッスか？ 魔界からッス」

「「魔界？」」

馬が遭わないくせに、息は二人ともピッタリだった。

「まあ、僕もサイトと同じく異世界から来たと考えて貰って構わないッスよ。魔界つてのは、悪魔や化け物たちが暮らす世界で、僕はとある悪魔の下で働いていたッス」

……ん？ 二人とも口をあぐりと開けて僕を見ていた。

「嘘でしょ？」

「本当ッス。僕みたいな魔物がこの世界に他にいるッスか？」

「確かに……人語を話せるなんて、韻竜くらいしかないわね……だとすると本当？」

一瞬の静寂の後、ルイズ様は歓声を上げた。

「まま魔界ですって?! 御伽噺とかで出てくるあの人外魔境の？」

「!」

「そうッス」

「魔王とかいんのか？ どんな奴だった?!」

「天上天下唯我独尊、超俺様系男子ッス」

人間たちからすれば、魔界というのは物珍しいのだろう。そう思った感じで、根ほり葉ほり質問をされていた。

質問が終わると、ルイズ様は満足気に頷いた。

「分かったわ、信じるわよ、プリニー」

「おい、俺と対応が合わないか？」

「あんたは黙ってなさい。最初はパツとしないハズレくじを引いた
と思ったけど、こんな強いのを呼び出せるなんて」

「あ、ルイズ様？　一つ言っておくッス」

「何よ？」

「僕、戦闘能力も知識も殆ど無いッスよ」

ピシリ、とルイズ様は固まった。

「どういうこと……？　あんた魔界から来たんでしょ？」

「魔界をどう思っているかは知らないッスけど……プリニーって種
族は、魔界ヒエラルキー的には最低に位置づけられているッス。最
初に言った通り、雑魚キャラッス」

「……強くないの？」

「犬にも負ける戦闘能力ッスね」

「……知識もないの？　秘薬とか作れない？」

「作れないッス。そもそも、魔界とここでは素材が違うと思うッス
よ」

ルイズ様は能面のような表情になり、平坦な声で告げた。

「使えないわね。死になさい」

「横暴ッス！」

僕は心の中で涙を流した。そして、サイトの胸に飛び込んだ。サ
イトはぎゅっと僕を抱きしめ、胸に抱いた。

「ふぁーあ、とりあえずサイト。あんたの言うことは信じてあげる。
……しつこそうだし」

「なんだと？」

「で、私の使い魔になりなさい」

「はぁ？ 何でだよ？ 元の世界に帰せ」

「無理よ。サモン・サーヴァントは呼び出し専門だから」

「なら、もう一度その魔法を俺にかけてみるよ。もしかしたら帰れるかもしれないだろ？」

ルイズ様は一瞬悩むが、すぐに頭を振った。

「無理ね」

「どうして？」

「サモン・サーヴァントを再び使うにはね」

「うん」

「一回呼び出した使い魔が死なないといけないの」

「なん……だと？」

サイトは固まった。うわあ、それってサイトは死なないといけないじゃないか。えげつなー、もし成功しても死体を送り返すことになる。

それは最早、新手のテロだな。

「死んでみる？」

サイトは力なく首を横に振った。

そして、ルイズ様の顔を見て肩を落とした。

「分かった。しばらくお前の使い魔になってやる」

「口の利き方がなっていないわね。『なんなりとお申し付けください、ご主人様』でしょ？」

従者としては当然の心構えだな。

「でも、使い魔って何をすんだ？」

「使い魔は主人の目となり耳となる……つまり使い魔が見たものは主人も見ることができるのよ」

それってプライバシーもクソも無いじゃないか。

サイトもそう思ったようで、嫌そうな顔をしていた。

「でも無理ね。わたし、何にもみえないもん！」

サイトはホッと息をついた。

「それから使い魔は主人の望む物を見つけてくるわね。でも、それに関しては期待しないわ。秘薬の存在すら知らないでしょ？」

「ああ……無理だな」

ルイズ様の機嫌がどんどん悪くなっていく。

「一番は使い魔は、主人の盾となり剣となるのよ。主人を敵から守ったり、敵を排除したり……けど」

ルイズ様はチラッと横目でサイトを見た。サイトの体格はお世辞にもがっしりとはしてない。

明らかに失望したようなため息をついて、ルイズ様は言葉を放った。

「あんたはカラスにも負けそうだしね」

「うっせ」

「だから、あんなにも出来そうなことをやらせてあげるわ。そのペンギン、あんたも聞きなさい。あんたはコイツのサポートをして貰うんだから」

「分かったッス」

コホン、と咳をしてからルイズ様は役割を発表した。

「掃除・選択・その他雑用」

「分かったッス」

「ざけんな！ そのうち絶対帰る方法を見つけてやるからな！」

はいはい、そうしてねとルイズ様は手をひらひらと返してきた。

「さてと、もう遅い時間だしもう寝ましょ」

「俺はどこで寝るんだ？」

ルイズ様は床を指差した。

「犬猫じゃないんだけど」

「ベッドは一つしか無いし、使い魔にはそこで充分よ」

ルイズ様は毛布を一枚投げよこした。サイトは慌てて両手でそれを掴もうとしたので、必然的に僕は落ちる。

って、またかよ！

「取り扱いに気をつけて欲しいッス！」

「あ、悪い……って、お前は何を脱いでんだ！」

ルイズ様はキョトンとした声で返した。

「寝るから、着替えるのよ」

「俺のいないところでやれ！　まずいだろ！　それとも何か？　魔法使いつて男に見られても平気なの？」

「はぁ？　使い魔に見られたって何とも思わないわ」

サイトはふてくされた表情をして、毛布を頭から被り横になった。犬猫のような扱いに腹を立てたのだらう。

ルイズ様もルイズ様だ。どんな教育を受けてきたのか。

（僅かに顔が赤かったツスから、羞恥心はあるようツスけど）

もしかして、意地でもサイトを使い魔として扱う気なのか？　人間ではなく。だからちよつと無理をしているのか。貴族なら普通は、男にみだりに肌を見せるとか教育されていそうだし。

「じゃあ、これ、明日になったら洗濯して」

ルイズ様はキャミソールとパンティを投げた。サイトはそれを掴むと、屈辱と歓喜からか顔を真っ赤にさせた。

「何で俺がお前の下着を！　嬉しいけどふざけんな！」

「自分に正直ツスね、サイト」

「あのね、誰があんたを養うと思ってんの？」

サイトは言葉を詰まらせた。まあ、正論だからなあ……。

「掃除洗濯雑用、これ位当然よね」

「分かったよ！」

サイトは再び毛布にくるまった。

ルイズ様はそれを見ると、一回小さく欠伸をして指を鳴らす。
部屋のランプの灯りが消えた。

そして、ベッドに横たわると直ぐに寝息が聞こえてくる。

部屋の中に夜の帳が降りた。

「なあ、プリニー」

「何スか？」

「俺、生きていけるかな。この世界で、元の世界に戻るまで」

サイトの声はどこか弱々しさを感ぜさせた。考えてみれば、よくパニックを起こさなかったな。いきなりキャパシティーオーバーの事態に陥れば、普通は、もっと錯乱して当たり散らすだろうに。

サイト自身の環境適応力が高いのか、性格が一因しているのか。恐らく、そのどちらもだろう。

よくここまで弱みを見せなかった。僕は素直に感心した。

「大丈夫ッスよ。人生なせばなるッス」

だから、僕はサイトの支えになれるような声をかけた。
事実、僕はエトナ様の下で生き残った。

サイトはそっか、と一言言つとそのまま眠ってしまった。

さて、僕も眠るとしようか。

初めての朝ッス

目が覚めると、腹の上に重みを感じた。

眠気眼をこすり、そこを見てみると、サイトが僕の腹を枕代わりに使って気持ちよさげに寝ていた。

……重いな。

「サイト、サイト、起きるッス」

「ん……あ？」

手でぺちぺちと叩いて起こす。

サイトはむくりと上体を起こすと、きよろきよろと辺りを見回した。

そしてから漸く僕に目を向ける。まだ、眠そうな顔だった。

「おはようッス」

「あれ……ぬいぐるみが喋ってる」

「何を寝ぼけてるッスか？ 僕はプリニーツスよ」

「……あ」

サイトの意識も覚醒したようだ。

シャキッとした顔付きになり、同時に顔を青ざめさせた。

「夢じゃなかったのか……」

「当たり前ッス。夢落ちなんて展開そうそう無いッスよ。サイトの手が握ってるそれが証拠ッス」

サイトは自分の握っているものを見て、固まった。

「旦那も変態ツスねえー、美少女の使用済み下着を握ったまま眠るなんて」

「不可抗力だ!」

「何のツスか」

顔を赤らめ、僕にそれを投げた。

ルイズ様のパンティとキャミソールが顔にぶち当たった。

「……八つ当たりツス」

「うつせ。お前が変なこと言うからだ」

「満更でも無いくせにツスか?」

「そりゃ、役得……なわけあるか!」

うがーつとサイトが吠えた。流石思春期の少年だな。こういう話に弱い。ただ、一般的な思春期少年より、自分に正直な気がしないでもない。

「う……ん……」

サイトの声が大きかったのか、規則的な寝息を立てているルイズ様が唸った。

起きるか? と思ったが、どうやら寝返りをうつただけのようだ。

「サイト、とりあえず、まずはルイズ様を起こすツス」

僕の経験上、ルイズ様をキチンと起こさなければヒドい目に合う。

サイトも薄々気がついたようで、不満顔になるも、ルイズ様の体を揺すった。

僕はその間に、ルイズ様が今日使うであろう下着と制服を用意する。

「サイト、ルイズ様は起きたツスか？」

「あんた……誰よ？　とうかぬいぐるみが喋ってる？」

「ハア？　寝ぼけんな、お前が呼び出した平賀才人だ。……あと、そのネタはやったから二度目はいない」

ルイズ様は朝が弱いのか、しばらくはぼーっと虚空を眺めていた。

「ああ、そついやそうだったわね」

しっかりと意識が覚醒したのか、僕たちのことを思い出したようだ。

「それじゃ、服を着せて」

「なっ、お前がやれ！」

「何言ってるの。あんたの役目でしょ」

サイトが目で助けを求めてきたが、僕は首を横に振り下着をサイトに差し出す。

「諦めが肝心ツスよ」

「くっ、この裏切り者！」

そう言われても僕は人形サイズだし、どうやって着せると？

サイトは嬉しさ半分、悔しさ半分と言った表情でルイズに下着を穿かせ、服を着させた。

「何で自分で着ないんだよ」

「貴族は普通、使用人の前では自分で着ないわ。勝手にやってくれるし」

「けっ、ブルジョアめ。プリニーもそう思うだろ？」

「うえ？」

話をいきなり振られ、上擦った声が出た。

「そうツスねえ……貴族ってそんなもんじゃ無いんスか？　むかつくツスけど」

ポロツと本音が零れ落ちた。あ、しまったと口を抑えた時にはもう遅い。

「あ、あんたたちね……」

ルイズ様の肩が怒りでプルプルと震えている。

「朝ご飯抜き！」

「今のはサイトが悪いツス！　誘導尋問ツス！　不可抗力ツス！」

「プリニーお前……！　昨日は良い奴だと思ったのに！」

「うるさいツス。こちら昨日から何も食べて無いんスよ。死活問題ツス！　食べ物には妥協でき無いツス。朝飯食べないと頭が働かないんス。サイトはバカだから朝飯はいらないだろうけど、僕には必要ツス！」

「なに?!　聞き捨てなんねえな。プリニー、表に出ろ！」

「上等ツス！」

「あんたたち、うるさいから昼も抜きね」

「「そんなあ！」」

食事を与えられないことに、サイトと共に絶望しながらルイズ様

と共に部屋を出る。

「あら、おはよう。ルイズ」

向かいの扉の一つがひらき、燃えるような赤い髪のナイスバディの女の子が現れた。

（ぼん、きゅ、ぼんツス）

エロチックな色気をムンムンと放つ女の子は、自分の身体をどうすれば魅力的に相手に感じさせれるのかを熟知しているのだろう。一番目と二番目のブラウスのボタンを外し、胸元を覗かせていた。サイトの方を見上げてみると、食い入るように女の子の胸を見ていた。

……欲望に忠実だな。

「おはよう。キュルケ」

「あなたの使い魔って、それとこれ？」

キュルケと呼ばれた女の子は、バカにした様子で言った。

「そうよ」

「あつはは！ こんなへんてこな使い魔たちを喚ぶなんて……流石はゼロのルイズね！」

「うるさいわね」

「あたしも昨日、使い魔を召喚したのよ。フレイムー」

キュルケが猫なで声で、自身の使い魔を呼んだ。すると、のそのそと赤い巨大トカゲが現れる。

「ヒイツ、真っ赤な何かツス」

サイトは慌てて後ろに下がった。僕を置いて逃げるとは……。トカゲは、シュルルと舌を出すと、ぎらつく双眼を僕に向けてきた。

あれは、獲物を狩る目だ。

フシャーと荒い息をはきながら、トカゲは襲いかかってきた。

「こ、殺されるッス！」

僕は両手を上げて、その場から駆け出す。けれど、追いかけてくる巨大トカゲ。

ぐるぐると僕はルイズ様たちの周りを回って逃げる。

「あら？ あたしが命令しない限り襲ったりしないのに……気に入られたわね」

「そ、そんなのどうでもいいッスから助けてッス！」

キュルケは仕方ないわね、と言いながらトカゲに僕を襲うのを止めるように命令した。

主人に怒られて、しゅんとなってるトカゲをみて、少し溜飲が下がった。

「た、助かったッス」

「あんなね……。キュルケの使い魔くらい撃退しなさいよ」

「無茶言わないで下さいッス！」

主人からの冷たい言葉に涙する。

サイトはぼんと僕の肩に手を置いた。そして、アイコンタクト。

(プリニー、強く生きる)

僕はうなだれた。

「それって、サラマNDER？」

「そうよ。火のメイジで『微熱』の二つ名に相応しい使い魔だわ。好事家に見せたら、値段なんかつかないわよ」

そう言って、キュルケはトカゲに抱きついた。トカゲは嬉しそうに喉を鳴らした。

「ささやかに燃える情熱は微熱……男の子は一撃よ」

そう言って、キュルケは胸を張り、投げキッスをサイトにした。負けずにと、我が主も胸を張った。

サイトと僕はそれを見比べる。

「小さい……な」

「小さいッスね」

「相手は大きいな」

「メロンッスね」

「ロマンだな」

「ロマンッスね」

そんな会話をコソコソしていると、ルイズ様にキッと睨みつけられた。

黙らないと、殺すと目で語られたら黙るしかない。

「ふ、ふん！ わたしはあんたみたいにいちいち色気をふりまくほど暇じゃないのよ！」

「負け惜しみッスね」

「あんたはいちいちうつつさいのよ！」

キュルケは余裕そうに笑った。

「あなたたち、お名前は？」

「平賀才人。で、こっちは……」

「プリニーッス」

「ヒラガサイト？ プリニー？ 変な名前」

「「やかまし」」

キュルケはふつと髪をかきあげた。

「それじゃ、お先に失礼」

そして、颯爽とサラマンダーと共に去っていった。

その後ろ姿が見えなくなると、ルイズ様は拳をつくり地団太を踏んだ。

「むかつく！ 何よあの女！ 自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからって！」

「いいじゃねえか」

「よくないわ！ メイジの実力をみるには使い魔を見ろって言われているの。ああもう！ 何でわたしは平民とへんてこなぬいぐるみなよ……」

「まあまあ落ち着いて下さいッス。珍しさなら僕ら負けてないッスよ?」

「そうだ。それに人間の方が何かと都合がいいじゃねえか」

「平民とメイジには、犬とオオカミほどの違いがあるのよ」

呆れた調子でルイズ様は言った。

サイトはああそうですか、と適当に相打ちをうつ。あれ……そういえば。

「そういえば、ゼロのルイズってなんスか? あの方が言っていたッスけど」

「あ、俺も気になってた。苗字?」

「違うわよ! わたしはルイズ・ド・ラ・ヴァリエール。ゼロはただのあだ名」

へえ、あだ名ねえ。

「どういう理由ッスか?」

「あんたたちは知らなくていいわ」

バツが悪そうにルイズ様が言った。

「むね?」

サイトが巨大な爆弾を投入した。

うわあ、勇氣あるなあ。ああいうぺったんこキャラには、胸の話はNGだろう、常識的に考えて。

ルイズ様は案の定顔を真っ赤にさせて、サイトを頬を叩こうとした。だが、サイトはさつとよけた。

「よけんな!」

「殴んな!」

僕は主と使い魔のじゃれあいをただ見ているだけだった。

（そういや、何でルイズ様は魔法を使わないんスカね……）
前の主人、エトナ様はお仕置きにバンバン魔法を使っていたのに。

食堂ツス

魔法学院の食堂前にたどり着いた。

どうやら、ここで食事をとるらしい。

何だかんだ言って、食事をとらせてくれるルイズ様に感謝しつつ、僕は食堂に足を踏み込もうとした。

「あ。待って、あんたは違うわ」

「ぐえっ」

ルイズ様にむんずと頭を掴まれ、持ち上げられる。

「な、何をするツスか?!」

「ここは、貴族……人間しか入れない場所なの。あんたは外」

「それじゃ、サイトもじゃないツスか?」

「コイツはまだ人の形をとってるからいいわ。あんたは……」

上から下までジロジロと見られる。

「一応、獣に分類されるからね……他の貴族が不快に思っわ」

「プリニー差別ツス!」

この姿になって初めて……でも無いな、もう何回目か分かんが悔しく思った。

「ま、そういう訳だから」

ルイズ様は手をひらひらと振って、中に入っていく。

「プリニー、お前の分まで旨い飯を食べてくるからな」

「……しみじみと言っても、全然慰めになつて無いツス！」

じゃ、とサイトはるんとスキップをしながら、ルイズ様のあとをついていった。

絶対に後でイタズラしてやる。そう黒い感情が胸の中でくすぶつた。

が、腹が鳴って気分が萎える。

ああ、なんて思いやりの欠片もない主人と同僚なんだ。

「横暴ツス……プリニー労働法違反ツス……」

僕の呟きに反応する人はいない。ここに来て初めて、異世界なんだなあと実感した。

エトナ様の下で働いていた時は、大変だったけど仲間がいた。助け合って生きてきたのに……。

「……世知辛い世の中ツス」

まあ、戻ろうとは思わないけど。

床に手をつく。ピカピカのフローリングに映る自分の顔をみて、情けなくなつた。

「あの、大丈夫ですか？」

「……うん？」

声をかけられたので、振り返ってみるとメイドの格好をした素朴な少女が僕を心配そうに見ていた。

カチューシャで纏めた黒髪……ナイスだ。僕の心にぐつときた。

そばかすもマイナスイメージには繋がらず、彼女の可愛さを際立たせている。

「誰ツスか？」

「私は、シエスタです。ここの学院のメイドをさせていただいてます。えっと……」

「僕はプリニーッス」

「ああ、あのミス・ヴァリエールが召喚した喋るぬいぐるみの」

僕がどう噂されているのか非常に気になった。

「それで、プリニーさんはどうしてこんな所で？」

「それはツスね……」

僕はいつままでシエスタに説明した。

彼女は僕の話、うんうん言いながら聞いてくれた。……ええ娘やなあ。

「つまるところ、プリニーさんはお腹が減ってる訳ですね」

「そうツス。使い魔の食べ物、生肉か草だつて聞いたんスけど、僕はそんな味気ないのは食べられないツス。出来るだけ、人間と同じものが食べたいんス」

元人間として、僕は食事だけは譲れなかった。

シエスタはしばらく考え込むと、何かを閃いたように手を打った。

「それじゃあ、私として一緒に食べますか？ 今ちょうど休みをいただこうと思っていたので」

「いいんスか？！」

「ええ、ここで遭ったのも何かの縁ですし」

そう言って、シエスタは笑った。僕にはその笑みが女神のように思えてならなかった。

シエスタに連れられてやってきたのは、食堂の裏にある厨房だった。

厨房の片隅にある椅子に座り、シエスタを待つ。彼女はシチューの入った皿を二枚持って帰ってきた。

「貴族の方々にお出しするものの余りですけど……」

「本当に食べていいんスカ？」

「ええ。コック長のマルトーさんにも許可を得たので」

僕はスプーンを手にとり、シチューを恐る恐る口に運んだ。

「お、おいしいッス！」

温かいシチューの味は、絶品だった。美味しさが口の中に広がり、心にまで染み込んでいく。

「お口にあって何よりです」

「美味しいッス！ 美味しいッス！」

やべ、涙が出てきた。

もう本当に感動だ。

「ふふ」

シエスタは静かに笑うと、自分の食事に集中しはじめる。異世界に来て、初めてゆったりとした時間を過ごした。

「ご馳走さまでしたッス」

食事を終え、僕はシエスタに礼を言う。

「ありがとうッス。お陰で餓死せずに済んだッス」

「いえいえ」

シエスタは、ひまわりが咲いたかのような笑みを見せた。

ルイズ様もこんな風に笑えればいいのに……ブスツとしていないで。

ルイズ様の事を思い出すと、ふと気がついた。今はなんとか飯にありつけたが、これからどうなるか分からない。

「あの、シエスタ。一つお願いがあるんすけど」

「はい？」

「厚かましいようすけど、僕を食堂で働かせてくれないッスか？」

「え？」

シエスタはきょとんとした顔になった。

「あ、お金とかは良いッス。ただ、賄い食を頂ければ」

「えっと……」

「ルイズ様は絶対に食堂にいてくれないだろうし、お願いしますッス！」

ぺこりと頭を下げる。シエスタは困ったように頬を掻くと、申し訳なさそうに謝った。

「なんとかしてはあげたいんですけど、私が決めるわけにはいかな

くて……」

「ああ、ゴメンっス。確かに、シエスター人で決められるもんじゃ無いッスよね」

人事権を一人のメイドが持っているはずがない。テンパっていたので気がつかなかった。

すると、奥から熊のような体格の大柄の男が出てきた。

「マルトーさん！」

マルトーさん？ ああ、コック長の。

「話は聞かせて貰ったぜ？ お前さん、ウチで働きたいんだって？」
「はいッス！ よろしく願いしますッス！」

マルトーさんは、ふむと腕を組むと僕をジロジロと観察した。

「毛は落ちそうに無いが、衛生的にな。お前さんサイズのコック服はねえし……」

「あ、それには及びませんッス。自前のを持っているんすで」
「なに？」

僕はポーチの中から、コック服を取り出し着替えた。前の主人のエトナ様の食事を作るのもプリニーの役目だった。だから、彼女に雇われているプリニーなら、誰でも持っている標準装備なのだ。

少し大きいコック帽をカポツと被り、胸を張る。

「これでどうッスか？」

「うわあ、可愛いです！」

シエスタの目が輝いている。シエスタは自分の部屋にいくつかぬいぐるみを持ってそうだな……。

「むう……お前さん、料理は出来んのか？」

「勿論ッス」

掃除洗濯炊事その他雑用まで、何でもこなす万能型雑魚キャラとは僕のことだ。

戦闘はからつきしたが、雑用は任せなさい。

「じゃあ、簡単な料理でも作ってみてくれ」

「アイアイサー！」

厨房のスペースをお借りして、僕は食事をつくることになった。料理は……さつき食べたシチューで良いか。

自前の包丁と鍋をポーチから取り出す。このポーチは四次元ポケットのようなもので、基本的に何でも入るのだ。プリニーたちの間では必須アイテムである。

食材を次々と切り刻んだり、煮込んだりと僕のスキルを遺憾なく発揮する。

「おお、すげえ。慣れてやがる」

周りのコックたちも、なんだなんだと覗いてきた。気にせず、調理を続け完成させた。

「はい、お待ちッス」

「どれどれ……」

マルトーさんは僕が作ったシチューを一口啜った。
緊張の時間が流れる。

「うん、問題なく美味い。これなら大丈夫だ」

「良かったッス！」

エトナ様に鍛えられたもんなあ……あの人不味かったらすぐにキ
レルから、命懸けだったし。思わぬ所で経験が活かされたようだ。

「お前さん、でも貴族の使い魔なんだろう？ 厨房で働くのは時々で
いい。賄いはいつでも出してやるからよ」

「あ、ありがとうございますッス！」

マルトーさん含め、使用人の方たちの優しさに感激した。

「もうすぐ、授業が始まるぜ？ シエスタ、悪いがコイツを主人の
教室まで連れて行ってやれ」

「はい、分かりました」

僕は、こうして職と食事を手に入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2155u/>

ゼロの使い魔ッス！

2011年11月13日10時25分発行